# 誇り高き日本の総合芸術「能」

千西一遇

第85号
発行
2021年
9月29日(水)
上田西高校
新聞委員会
編集局
編集局長:堀内日菜子
新聞委員長:橋爪ここ菜
生亀亜実

## 長い歴史持つ世界最古の伝統芸能

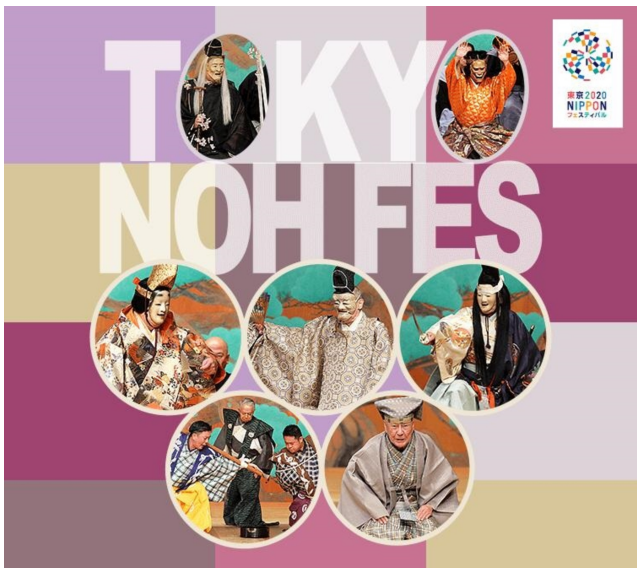
8月17日、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会が主催・共催する公式文化プログラム「NIPPOnフェスティバル」の一つ、「東京オリンピック・パラリンピック能楽祭」の合同取材会がオンラインのビデオ会議方式で開催された。人間国宝の能楽小鼓方大倉流十六世宗の大倉源次郎さんと能楽協会理事のシテ方宝生流の金井雄資さんに話を聞いた。

取材会は最初に能楽協会の若林さんから能について教わるところから始まった。能とは700年の歴史を持つ世界最古の芸能である。歌舞伎が300年の歴史であることからその歴史の深さは一目瞭然だ。祈りを込めた芸能で日本の歴史の中で国主催の行事で行われてきた。特に江戸幕府では公認されていたという。近代でも1964年に行われた東京オリンピックの開会式でも「オリンピック能楽祭」と銘打った公演が行われるなどまさに日本を代表する芸能の一つである。若林さんによると「能の素晴らしさとは単なる芸能ではなく、公演を見ることのよって自分と向きあう芸能」だということだ。

能はただ見るだけでは理解できない。自分から寄り添うことで初めて理解できる。「立ち止まって自分を振り返る機会になる」とのことだった。能は心が疲れた時、新しい自分を見つけたいときに見ると良いともいう。また、現在では能を見に行くと場所によってはイヤホンガイドがあるところや開演前に解説があるところがある。最近では能などに対して敷居が高いと遠ざける人や内容が難しいという人も多いが内容を理解しようと思えばいくらでも材料はある。「中にはコロナ禍に合わせてVRの上映までも存在している。多くの人に能を知ってもらいたい」と若林さんは話していた。

（生亀亜実）

第２０回アシテジ世界大会での公演「羽衣」より




東京オリンピック・パラリンピック　能楽祭
＝公式ホームページより

能について教えてくれた能楽協会の若林さん

## 入念な稽古で人から人へ伝える

若林さんからのレクチャー終了後、大倉源次郎先生と金井雄資先生の公演が始まった。大倉先生は能楽小鼓方大倉流十六世で7歳の時にオリンピックで初舞台を飾り、現在人間国宝、金井先生はシテ方宝生流で現在能楽協会理事を務めている。1964年の6歳の時に初舞台に立った。最初に「羽衣」という公演の実演があった。「羽衣」とは三保松原を舞台とした物語である。公演のあとはワークショップがあり、能の声の出し方と小鼓の打ち方をオンラインで体験した。

声は旋律を描き音に余韻をつくるようにだす。音は14階もあり難易度は高い。小鼓は音のフルオーケストラと呼ばれている。チ・タ・プ・ポの4つがあり、やはり難易度は高い。また、小鼓は150年前の馬の皮と400年前の銅の芯が使われていて毎日手入れをしなくてはならないそうだ。

こうして話を聞いてみると、伝統を引き継いでいくということがどれほど大変なことなのか改めてわかる。だが、今回はあくまで画面越しで見たり聞いたりしただけであった。「それだけで分かった気になってはいけない」と先生方は話していた。ワークショップの後はインタビューが行われ、多くの参加者が様々な質問を投げかけていた。

その中で、「能を演じる上で大切にしていることはなにか」と尋ねる質問があったが、これに対し2人は「人から人へ伝えていくことや絶えず稽古すること。映像に残しても伝わらない、伝統は博物館の中にあるものではなく芸者が伝えていくもの」と話していた。まさに日本の文化の総合体である。また、伝えていくことに関しては、教科書などのように間接的に伝えていくのではなく、「稽古を通して伝えていくこと」、「メンテナンスや手入れなども含めて次の世代に伝えていくこと」を大切にしているという。さらに意識していることは「社会と伝統芸能をつなげること」、「自分でとことんやっていくこと」、「何を求めていくか、目的をもって生きていくこと」、「チャンスを逃さず自分の手でつかんでいくこと」と語った。2人からは、能にかける熱い思いを聞くことができた。

（生亀亜実）

人間国宝の大倉源次郎さん（写真左）と能協会理事の金井雄資さん（写真右）

## 世界に伝わる日本文化

能楽で伝えられている物語は、ほとんどは名もない人の無念の話だ。そして、その人間の業は国境を越えて伝わる。日本を代表する芸能伝統である能は海外でも公演されている。その中でもドイツで公演した際は公演後現地の人に「登場人物の気持ちがよく分かった」、「感動した」と言われたことがあるという。海外であっても日本の伝統芸能が伝えてきたものは伝わるということだ。

実は世界には能を知っている人はたくさんいるという。そんな中日本に住む人の方がむしろ知らないことの方が多い。能というのは非常に公演のレパートリーが多く、新作の能もいまだに上演されている。それなのに一曲も見たことがないのはなんともったいないことだろうか。崩すのは大変だが「限られた技の中でやっていくことが無限の表現力になる」、「能の公演には分かりにくいところがあるがだからこそ心の中にその人のステージがつくられ理解につながる」と先生方は語った。現在全国に90か所ほど能の舞台がある。身の回りに能に触れる機会がたくさんあるのだから直接能を鑑賞することで新たな価値観の発見が生まれるかもしれない。

（生亀亜実）